

「人権意識を学ぶ」授業から 「実践行動を学ぶ」授業へ ～実践行動につなぐ4つの視点～

子どもは、これまでの人権・同和問題学習を通じて、自分や他者の人権を守ろうとする意識・意欲・態度（人権意識）は育ってきています。しかし、実際の生活場面に当てはめると、子どもの人権意識が実践行動へと結びついていないという課題があります。

そこで、『人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕』で示されている人権教育の目標や人権教育を通じて育てたい資質・能力を再確認し、「**自分の人権を守り、他者の人権を守るための実践行動**」につなぐために授業の改善・充実を図りましょう。

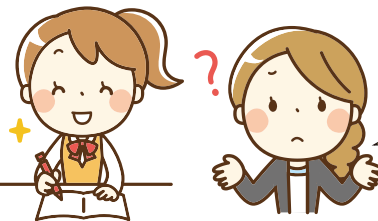
◆ 現状と課題 ◆ 子どもの意識

差別はいけないことだとわかりました。

差別を許さない人になりたいです。

差別をする人がいたら、注意したいです。

早く差別の無い社会になってほしいです。



もし、差別に出合ったとき、本当に行動できるのだろうか…。このままの授業でいいのだろうか…。

授業の終末でこのような発言をよく聞きます。確かに子どもの素直な思いでしょう。しかし、**子どもの学びが建前や心がけで留まっている**かもしれません。例えば、クラスでいじめがあったとき、本当に見過ごさず行動できるのでしょうか。



◆ 現状と課題 ◆ 教師の意識

◇満足できる取組内容(人権・同和教育で育てたい資質・能力に関する教員満足度)◇

資質・能力の3つの側面	小学校	中学校	高等学校
知識的側面の習得	61.3%	70.1%	70.0%
価値的・態度的側面の習得	90.3%	83.6%	80.0%
技能的側面の習得	60.0%	40.3%	55.0%
満足できる取組はない	1.3%	3.0%	5.0%

価値的・態度的側面の満足度は、知識的側面、技能的側面に比べて、高い数値を示しています。

(令和元年度 香川県人権・同和教育推進状況調査より)

これまで、人権・同和問題学習の中で、「思いやり」、「差別を許さない気持ち」など心の育成(価値的・態度的側面の習得)に重点を置く授業は多く実践されてきましたが、それだけでは実践行動には結びつきません。**実践行動につなぐ知識や技能**を身に付けるための取組が必要です。

実際の生活場で実践行動ができる子どもを育てるために、人権・同和問題学習の授業づくりについて考えていきましょう。



◆ 指導等の在り方 ◆ 目標と育てたい資質・能力

【学校教育における人権教育の目標】

一人一人の児童生徒がその発達段階に応じ、

- ①人権の意義・内容や重要性について理解する(人権に関する知的理解)
- ②自分の大切さとともに他の人の大切さを認める(人権感覚)
- ③様々な場面や状況下での具体的な態度に現れる(人権意識)
- ④様々な場面や状況下での具体的な行動に現れるとともに、
人権が尊重される社会づくりに向けた行動につながる(実践行動)



人権教育が求めているのは、「実践行動」です。人権に関する知的理解や人権感覚を養い、人権を尊重しようとする『人権意識を学ぶ』授業に留まらず、人権課題の解決や人権が尊重される社会づくりに向けた『実践行動を学ぶ』授業へ高めていくことが必要です。

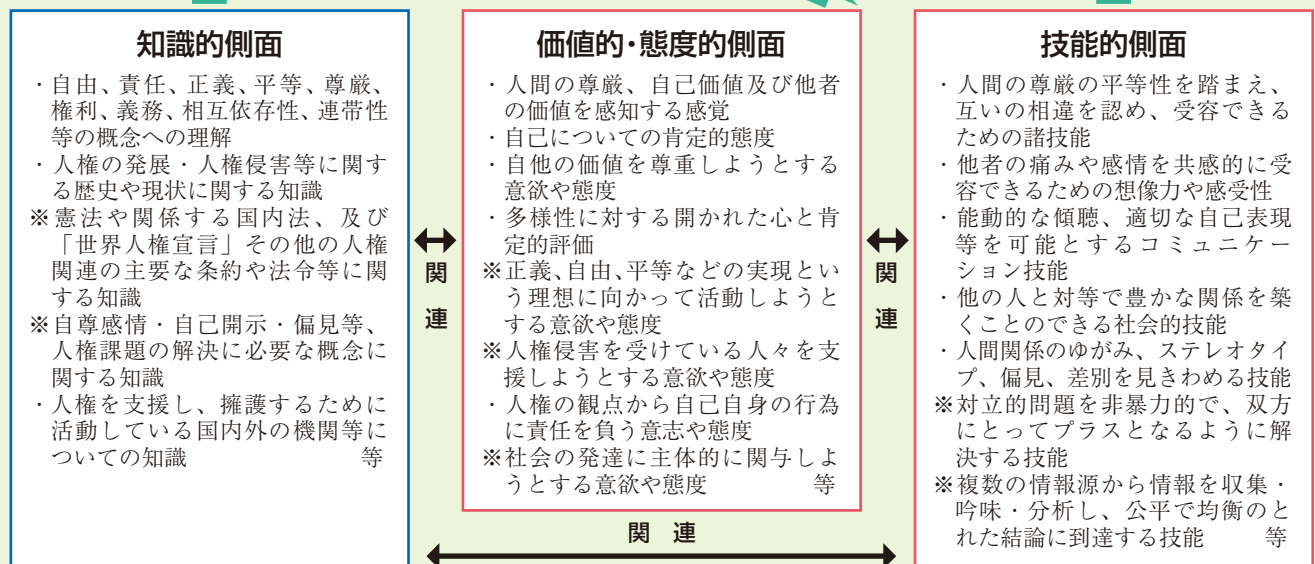
【人権教育を通じて育てたい資質・能力】

④自分の人権を守り、他者の人権を守るための実践行動

③自分の人権を守り、他者の人権を守ろうとする意識・意欲・態度

①人権に関する知的理解

②人権感覚



全ての関係者の人権が尊重されている教育の場としての学校・学級

【人権教育の指導方法等の在り方について [第三次とりまとめ] 指導等の在り方編 p 7 より】

上図の※の内容は、人権侵害を予防・解決するための**生きた知識**、他者や社会と**主体的に関わろうとする意欲や態度**、合意形成のための建設的な**問題解決技能**であり、実践行動には欠かせない要素です。

しかし、国の人権教育の推進に関する取組状況の調査結果(H25)からは、これらの育成に力点を置いている学校は少ないと言えます。



◆ 指導等の在り方 ◆ 指導方法と指導内容の充実・改善

人権・同和問題学習の授業改善に当たっては、これまでの授業が「実践行動につながる授業であったか」を振り返ることが重要です。下の読み物資料を例に考えてみましょう。

かずひろくん

かずひろくんは、
ぼくが ひとりしていると、
「いっしょに あそぼう。」
と、いつて くれます。

ぼくが、ころんで ないていると、
「だいじょうぶ、いたくないの。」
と、いつて くれます。

学校から かえるときも
いつも まって くれます。

ぼくは かずひろくんが
だいすきです。

香川県教育委員会
人権・同和教育指導資料（小学校編）
平成十六年三月発行



これまでの指導案で、本当に実践行動につながることができるでしょうか。
例えば、本時の目標を「心を持つことができる」ではなく、「**行動の仕方がわかる**」
とすることで、授業展開が大きく変わってきます。

1 児童(生徒)の実態例

本学級の児童(生徒)は、まだ自己中心的であることが多く、周りに困っていたり、一人でさびしそうにしていたりする友達がいても気付かないことがある。

2 展開例

(1) 本時の目標

どんな時にも友達に親切にし、進んで助け励ましていこうとする心を持つことができる。➡ **行動の仕方がわかる。**

(2) 学習指導過程(※授業改善のポイント)

(人権意識)

(実践行動)

これまでの『人権意識を学ぶ』学習活動例	これからの『実践行動を学ぶ』学習活動例
1 一人でさびしかったり、困ったりした経験を話し合う。	1 アンケート結果より、友達との関係を考える。 ○「今よりなかよくなりたいたいですか」 ○「どんなクラスにしていきたいですか」
※課題意識や必要感を持つための導入であるか	➡ 【実践行動につなぐ4つの視点 1 2 へ】
2 資料を読み、次のことを話し合う。 ○ どうして「かずひろくん」が大好きなのか。 ○ 「かずひろくん」はどんな子なのだろう。 ○ やさしくされた「ぼく」の気持ちはどうだろう。	2 資料を読み、次のことを話し合う。 ○ 同じような場面がクラスでなかったか。 ○ そのとき、行動できたか。 ○ 行動できなかったのはなぜか。
※自分事として捉えられる話し合いであるか	➡ 【実践行動につなぐ4つの視点 2 3 へ】
3 友達が困っているときに、どうすればよいか考え、役割演技をする。 ○ 休んでいる友達に対して ○ 遊びに入れない友達に対して ○ 一人でいる友達に対して	3 困っている友達に気付き、助け励ますことができるように、今できることを考える。 ○ 気付くことができるように ○ 助け励ますことができるように ○ 一人でさびしい友達をつくらないために
※実践行動に向けた学習活動であるか	➡ 【実践行動につなぐ4つの視点 3 4 へ】

子どもの実践行動力を育てるための授業改善として「**課題意識**を持つこと」、「**人権問題を自分事として捉えること**」、「**今できる実践行動**について考えること」を組み込んだ授業展開が必要です。

それでは、人権・同和問題学習の授業づくりや授業改善の基本的考え方をまとめた「**実践行動につなぐ4つの視点**」を確認していきましょう。



◆ 実践行動につなぐ4つの視点 ◆ 1 子どもの実態と計画立案

子どもとの関わりの中で、子どもの内に秘めた感情に出会うことがあります。それは、心の叫びとも言えます。また、子どもが豊かな関係性を築けず、仲間づくりが求められる場面も多くあります。子どもの生活課題から人権・同和問題学習を出発しましょう。

【子どもの切実な願いから計画へ】



【子どもの生活課題から計画へ】



人権・同和問題学習では、子どもの身の回りの出来事や暮らしと結びつけることを通して、**人権問題や生活課題の解決の手法や道筋**を学ぶことが重要です。

そのために、**子どもの切実な思い**や**生活課題が反映**された人権・同和問題学習の意図的・計画的な取組が必要です。

子どもは、**生活に役立つ**学びを求めています。



魅力ある学びとするためには、子ども自身が心と頭脳と体を使って、主体的に学習に取り組むことが不可欠です。

その点で、人権教育の指導方法の基本原則として、「協力」、「参加」、「体験」を中核に置くことが重要とされています。

- ①「**協力的な学習**」: 協力しつつ共同で進める学習
- ②「**参加的な学習**」: 主体的に参加することを基本とする学習
- ③「**体験的な学習**」: 具体的な活動や体験を通じた学習



☆計画立案のポイント☆

- **子どもの実態を踏まえ、子どもが取り組み易く、解決可能な学習課題を設定する。**

日常生活の延長線上に学習を位置付け、身近な課題設定をする。特に、解決を迫られている課題や成長が期待される課題であることが望ましい。

- **効果的な教材(読み物資料・体験的な活動など)を選定・開発する。**

教材としては、小説や人権作文、高齢者や障害のある人との交流活動、擬似障害体験活動、地域におけるフィールドワーク、外部講師の講話やふれあいなどの様々な形態がある。人権問題と自らのつながりが見えてくる教材の選定・開発が求められる。

- **授業の事前・事後の指導を工夫して本来の目的に合致させる。**

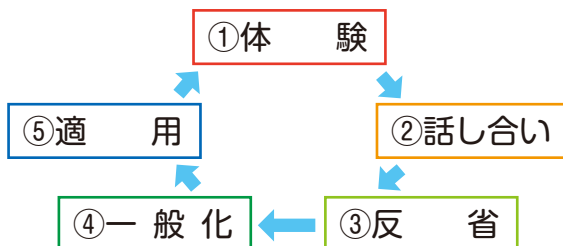
事前・事後の指導を位置付け、授業が効果的にねらいに迫るものとなるように工夫する。交流活動や奉仕活動などの体験的な活動では、何をどのように体験するのかについて、訪問先の機関と事前に協議・整理しておくことが大切である。

◆ 実践行動につなぐ4つの視点 ◆ 2 子どもの体験と授業展開

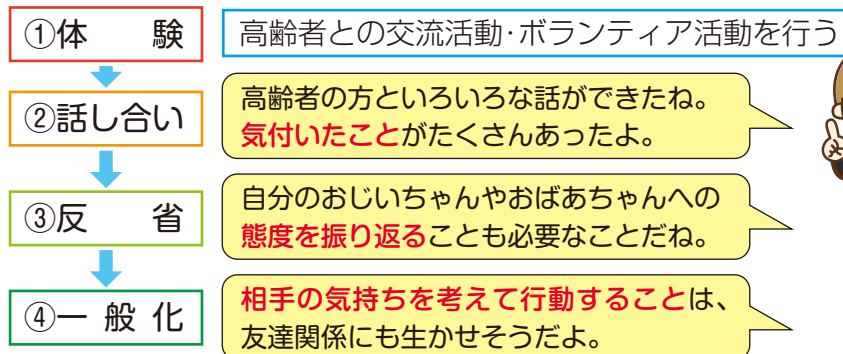
「体験」することは、それ自体が目的ではなく、いくつかの段階からなる学習サイクルの中に位置付くもので、「話し合い」、「反省」、「一般化」、「適用（実践行動）」という具体的、実践的な段階を丁寧に踏むことが大切です。

読み物資料でも、自らの体験等と重ねながら、学習サイクルを活用しましょう。

「体験的な学習」に関する学習サイクル



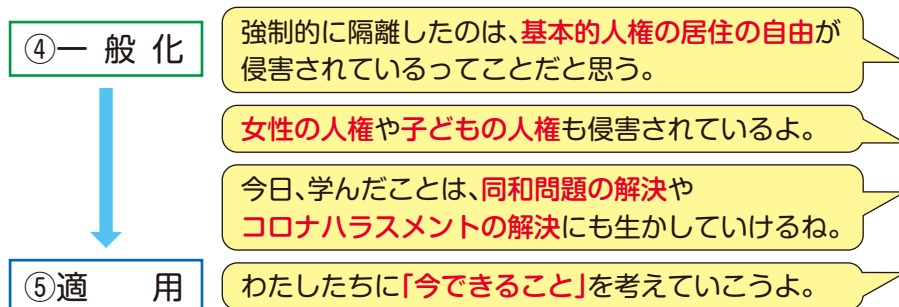
(例) 【高齢者福祉施設訪問から子どもの日常へ】



「自分自身と高齢者との日々の関わり方」について十分に振り返る活動や個々のくらしの交流を設定することで、学びを**日々の生活**や**友達との関係性**を高めることにつなげていきましょう。



(例) 【ハンセン病回復者との交流から基本的人権の尊重・他の個人人権課題へ】



「ハンセン病回復者の人権」を「基本的人権の尊重」と関連させることで、**人権に関する認識**が深まります。
また、一つの個人人権課題の学習で身に付いた力が**他の個人人権課題の学習でも生きる**人権・同和問題学習を目指しましょう。



☆授業展開のポイント☆

□「体験的な学習」に関する学習サイクルを活用する。

自己の行動や態度への「適用（実践行動）」までを意識させた授業展開が大切である。

□考察を深めるための話し合いを重視する。

体験からの学びを子どもの生活課題とつなげたり、普遍的な視点（法の下での平等、個人の尊重等）と個別的な視点（具体的な人権問題）を関連させたりする。

◆ 実践行動につなぐ4つの視点 ◆ ③ 子どもの本音と問い返し

子ども一人一人が人権問題への自覚を深め、自分の考えを深め広げていくことのできる人権・同和問題学習にするために、指導の過程では、子ども一人一人の本音を引き出すことが大切です。本音の交流を通して、一人一人が今後の自己の行動を前向きに捉えていけるように、子どもに何を語らせたいのか整理しましょう。

【本音を引き出すクラスへの問い返し例】



人権問題と実際にクラスで起こった出来事を重ねることで「差別するかもしれない意識」や「実践行動に移ることができないもどかしさ」等、**自分自身の弱さ**に気付いていきます。

「差別に加担する側に立っていないか」、「見て見ぬ振りをしていないか」等、教師には、「ゆさぶり」をかける問い返しをしていくことが必要です。

同時に、**子どもが安心して語るための場づくり**が重要です。



【課題解決に向けた問い返し例】



子どもに「差別に対する怒り」や「差別と闘う強さ」だけを求めていますか。人権問題を「心」だけで解決することはできません。

「実践行動」につなぐ問い返しを重ね、**課題解決のための具体的な知恵や方法**を追求する授業としましょう。



☆問い返しのポイント☆

□人権問題を自分の問題として捉えられるように実生活との関係を明確にする。

子どもに考えさせたい生活課題の具体例を提示する。そのために、授業の感想や生活記録等から日々の子どもの思いを把握することが求められる。

□誰もが「差別意識」や「弱さ」を持っていることを前提にした交流を設定する。

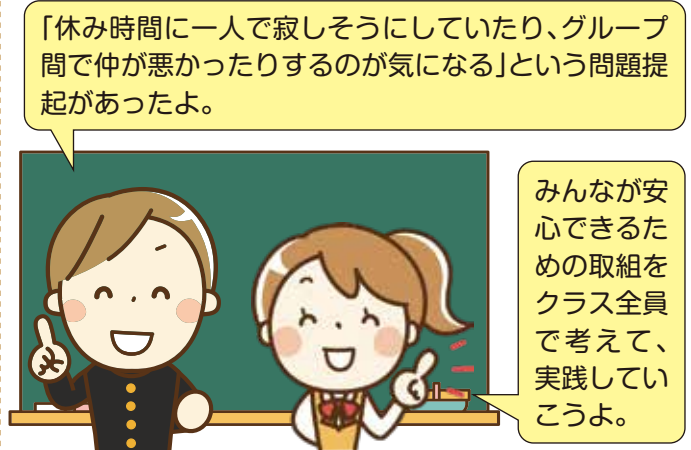
課題解決を心の問題で捉えると、「建前」や「心がけ」で終わってしまう。傍観者に留まってしまう要因を探り、行動に向けたスキルを身に付けることを重視する。

◆ 実践行動につなぐ4つの視点 ◆ ④ 子どもの生活と実践行動

人権・同和問題学習の最終段階では、自分たちの学んだことが本当に社会的に役に立つのか、実際に活用できるのかを確かめる活動が位置付けられなければなりません。

実践行動に向けて、「今の自分に何ができるのか」や「生活にどのようにいかしていくのか」を考えていくことは、学級づくりにおいても有効です。

【実践行動の2つのモデル】



【様々な場面や状況下での具体的行動】

生活経験に基づく具体的な行動や解決策を考えることに重点を置きましょう。

特に、今の自分にできることであり、自己評価ができることが重要です。

【人権が尊重される社会づくりに向けた行動】

差別や偏見を生まない人間関係づくりやルールづくりに重点を置きましょう。

特に、常時活動や居場所づくりとつなげることが重要です。

子どもが人権問題を直接的に解決したり、人権が尊重される社会づくりに参画したりするのは難しいことです。そこで、**実践行動の最初の場は教室**であると捉え、生活課題の解決から始めましょう。

人権が尊重される教室を創る練習を計画的に進めることで、自分の力で人権尊重社会を創ることができることを体感できます。この学びや成功体験の積み重ねは、将来、**社会への参画意識**や**実践行動の原動力**となります。

具体的な行動やルールづくりなど実践行動を考える際、意見がまとまらないこともあるでしょう。その際、**人権・同和問題学習の中で出会った人物や出来事**を振り返るとともに、子どもの実態に応じた複数の**ロールモデル**を提示しましょう。



☆実践行動のポイント☆

- 生活課題を解決するための実践の場や振り返りの機会を保障する。

日々の授業や特別活動と連動させるなど、実践行動の場を明確に設定する。そして、クラスや個々で計画した実践行動について自己評価できるようにしたい。

- 「今の自分にできること」について、クラスで提案を繰り返し、合意形成を図る。

課題解決の方法は、クラスの実態によって違う。一つでない答えを追求する営みに価値があり、人権が尊重される社会づくりの創り手として、一歩踏み出す力となる。

◆ 授業構想メモ ◆ 「実践行動につなぐ4つの視点」を踏まえて

1 児童生徒の実態

児童生徒の切実な願いや生活課題
育てたい資質・能力

2 題材について

題材(読み物資料・体験的な活動)の設定
題材から学ばせたいこと

3 展開

(1) 目標

実践行動につながる目標

(2) 学習指導過程

	学 習 活 動	教 師 の 支 援 活 動
事前		①効果的にねらいに迫るためにどのような準備ができるか
体験		
話し合い	課題意識や必要感を持つために	①どのような学習課題を設定するか ②人権課題や生活課題の現状とどのように出合わせるか
反省	自分事と捉えるために	②自分事と捉えるために、どのような視点で話し合わせるか ③振り返らせたい身近な出来事やクラスでの具体例は何か ③本音の交流のためにどのような問い返しや支援ができるか
一般化		
適用	実践行動に向けて	③課題解決に向けてどのような問い返しや支援ができるか ④「今の自分にできること」についてどのような交流を設定するか ④どのようなロールモデルを提示したいか
事後		④どのような実践の場や振り返りの方法があるか

※表中の① ② ③ ④は、「実践行動につなぐ4つの視点」を示しています。

令和3年3月